58

「千金方」の名称をめぐって

矢数　芳英[1,2]，小曽戸　洋[2]

[1]東京医科大学病院 麻酔科，[2]北里大学東洋医学総合研究所

近世以来，中国伝統医学の研究者のうちには，孫思邈の著を「千金要方」「千金翼方」といい，王燾の著を「外台秘要」と称し，四文字の書名でこれらを対比することが多いようである．しかし本来，「千金要方」は「千金方」であり，「外台秘要」は「外台秘要方」であるべきで，現在の混乱は看過できないものがある．以下，その是正すべき所以を述べる．

『中国医書本草考』（岡西，1974）には「千金要方」の項目を立て，また「千金翼方」の項目では次のように述べられている．

> 『外台秘要』や『医心方』では「要方」と「翼方」とが区別されていないものがあるが，それは両者が一連の書と見られたことを示すものであろう．

これは誤認で，この見解が以後，大きな誤解を招くもととなったのである．

『外台秘要方』（宋版）では「千金方」と「千金翼方」が出典巻次まで明記し厳然と区別して引用してある（小曽戸洋「宋版『外台秘要方』所引書名人名等索引」『東洋医学善本叢書』1981，第8冊所収）．「千金要方」などという表記はない．

『医心方』の引用はすべて「千金方」であり，「千金要方」「千金翼方」という表記の引用はない．この「千金方」は『千金方』からの引用で，『医心方』の本文に『千金翼方』からの引用は一切ない．『千金方』の日本への渡来は8世紀以降で，丹波康頼は『千金方』は見ていたが，『医心方』成立の時点で『千金翼方』はまだ日本へ伝えられていなかった．『千金翼方』の日本への将来は印刷物（宋版以降）によってであり，巻子本の渡来はなかったとみえる．前掲の「両者が一連の書と見られた」とする見解は当たらない．誤解の原因は「外台秘要医心方証類本草等所引用之古医書」（岡西・佐土，1937）の不備によるものと思われる．

孫思邈が650年代に著した医学全書の書題は「千金方」であった．これは宋改を経ない真本『千金方』（室町時代重鈔本，宮内庁書陵部所蔵）によっても，あるいは歴代経籍志や『旧唐書』『新唐書』孫思邈伝の記載によっても明らかであろう．「千金要方」と録する例はない．

北宋の1066年，林億らは『千金方』を『備急千金要方』と改題し初めて刊行した．これは孫思邈自序に「……以為備急千金要方一部凡三十巻」とあるに基づくものであろう．しかしこれは「備急のための千金の要方」といった意味合いとも解される．5世紀の『小品方』（『経方小品』とも）の目録には「要方の目録」と表記した例もある．『傷寒論』の張仲景自序に「……以為傷寒雑病論合十六巻」とあるところから，『張仲景方』が後世『傷寒雑病論』と称されるようになったのも，これに似たような経緯と思われる．孫思邈の原著は『千金方』，林億ら宋改本を『備急千金要方』と表記し分けると適確であろう．「千金要方」は「備急千金要方」の略称といえる．

『外台秘要方』は明刊程衍道本の書扉に「外台秘要」と刻されたことから，後世『外台秘要』と称されることが多くなったが，王燾自序，宋版の書式，歴代経籍志のいずれからみても『外台秘要方』が正しい．『医心方』などは「外台方」と略して引用するが，むしろこのほうが自然ではあるまいか．（ただし『証類本草』に「外台秘要」と略称する例がある）．

結論

「千金要方」「外台秘要」と称する書名は，「千金翼方」に対するいわゆる語呂合わせともいうべき呼称で，本来は『千金方』『外台秘要方』である．『備急千金要方』は林億ら校刊時の正式名で，林億ら宋改由来本はそう称するのが正確である．「千金方」が「千金要方」と「千金翼方」の総称でないことはいうまでもない．今日日中ともに表記にあいまいさがあるが，これは是正すべきである．